

氏名	上住 通代		
授与した学位	博士		
専攻分野の名称	歯学		
学位授与番号	博甲第6144号		
学位授与の日付	令和2年3月25日		
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科機能再生・再建科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)		
学位論文の題目	口腔顎顔面痛患者における心理社会的要因の検討 -ミネソタ多面的人格目録 (MMPI) を用いた分析-		
論文審査委員	吉山 昌宏 教授	仲野 道代 教授	前川 賢治 准教授

学位論文内容の要旨

(緒言) 一般に、口腔顎顔面領域の痛みの原因としては、歯や歯周組織の疾患（歯源性）や顎骨や周辺組織の炎症性病変が多いが、原因が不明であったり、痛みが想定以上に長期間持続している場合がある。当院歯科麻酔科外来では、口腔顎顔面領域の「痛み」や「知覚異常」を主訴とする患者に対する治療を行っているが、多くの患者は通常の歯科的処置及び口腔外科的処置では軽快しない難治性の痛み（以下、口腔顎顔面痛）を持っている。その症状には、心理社会的要因が少なからず関与していると考えられ、診断を困難にしている要因のひとつとして考えられる。心理社会的要因は身体症状に影響を及ぼし、診断を複雑にし、治療経過にも影響することが知られている。よって、口腔顎顔面痛患者に対して、初診時に心理社会的要因を評価することは重要であると考えられる。心理社会的要因の評価には一般に心理検査が用いられており、その中でも痛みの治療においてはミネソタ多面的人格目録 (Minnesota Multiphasic Personality Inventory: MMPI) の有用性が報告されている。

本研究は、口腔顎顔面領域の痛みが主訴であった当院歯科麻酔科外来の口腔顎顔面痛患者を対象に、診療記録から MMPI の結果を抽出し、口腔顎顔面痛患者の初診時の心理社会的要因を分析するとともに、臨床項目との関連について検討し、口腔顎顔面痛の診断または経過の予測に有用であるかどうか評価することを目的とした。また、三叉神経痛は身体的な疾患であることから、心理社会的要因の関与が少ないのではないかと推察されたが、三叉神経痛は症状が典型的でない場合があり、鑑別診断に苦慮する場合がある。よって、本研究では、三叉神経痛患者に注目して MMPI の有用性についても検討することとした。

(方法) 2014年5月1日から2019年4月30日までにペインセンター/歯科麻酔科を受診した20歳以上80歳未満の患者で、初診時にMMPIを実施した口腔顎顔面痛患者133人を対象に、MMPIの結果と患者背景、病悩期間、痛みの原因、および経過との関連について検討した。さらに、三叉神経痛については、三叉神経痛と三叉神経痛以外の患者の2群に分けて、有意な差はあるかどうかを評価した。統計

学的分析にはフィッシャーの正確確率検定を使用した。なお、本研究は本学臨床研究審査専門委員会の承認(研 1907-041)を得て行われた。

(結果) 対象の口腔顎顔面痛患者 133 人の性別は、男性 33 人 (24.8%)、女性 100 人 (75.2%) だった。年齢は 55.9 ± 14.2 歳 (23~79 歳) だった。罹患期間については、6 か月未満が 59 人 (44.4%)、6 か月以上が 74 人 (55.6%) だった。「身体症状症の疑い」が 38 人 (28.6%)、「筋・筋膜痛」が 27 人 (20.3%)、「歯原性病変」が 25 人 (18.8%)、「三叉神経痛」が 21 人 (15.8%)、「その他」が 22 人 (16.5%) だった。治療経過では、「経過良好」が 77 人、「経過不良」が 29 人、「不明」が 27 人だった。MMPI の臨床尺度の項目のうち、Hs (心気症) 尺度、D (抑うつ) 尺度、及び Hy (ヒステリー) 尺度で、異常傾向がみられた患者の割合が高かった。患者背景と MMPI との関連で、性別については男性は女性と比較して、K (修正) 尺度の異常傾向のある患者の割合が有意に高かった。たが、その他の尺度では差はみられなかった。年齢については 60 歳未満の患者は 60 歳以上の患者と比較して、D 尺度、Pa (妄想症) 尺度、Pt (精神衰弱) 尺度、及び Sc (精神分裂病) 尺度の異常傾向のある患者の割合が有意に高かった。一方、病悩期間と MMPI の結果との関連はみられなかった。治療経過と他の項目との関連を調べた結果、病悩期間が長い患者は治療経過が不良であった。三叉神経痛の患者は、他の原因の患者と比較して異常傾向のある患者の割合が有意に低く、Hs 尺度、D 尺度、Hy 尺度で異常傾向のある患者の割合が有意に低かった。

(考察と結語) 一般的に慢性疼痛患者では、健常人と比較して、MMPI の Hs 尺度、D 尺度、及び Hy 尺度が上昇するのが特徴といわれている。口腔顎顔面痛患者においても、それらの尺度で異常傾向のある患者の割合が高く、心理社会的要因が関連している可能性が示唆された。本研究では、病悩期間と MMPI の結果に有意な関連は認められなかった。MMPI は治療効果の予測についても関連があることが報告されているが、本研究では、MMPI と治療効果については有意な関係は認められなかった。一方、三叉神経痛は他の原因と比較して Hs 尺度、D 尺度、及び Hy 尺度の異常傾向のある患者の割合が有意に低く、心理社会的因子との関連が少ない傾向にあった。三叉神経痛の症状が非典型的であるため診断が難しい場合があるが、MMPI は三叉神経痛の鑑別診断に有用である可能性が示唆された。

論文審査結果の要旨

口腔顎顔面領域の「痛み」の中には、通常の歯科的処置及び口腔外科的処置では軽快しない難治性の痛み（以下、口腔顎顔面痛）があり、心理社会的要因が少なからず関与しており、診断を困難にしている要因のひとつとして考えられる。心理社会的要因は身体症状に影響を及ぼし、診断を複雑にし、治療経過にも影響することが知られている。よって、口腔顎顔面痛患者に対して、初診時に心理社会的要因を評価することは重要であると考えられる。心理社会的要因の評価には一般に心理検査が用いられており、その中でも痛みの治療においてはミネソタ多面的人格目録（Minnesota Multiphasic Personality Inventory: 以下、MMPI）の有用性が報告されている。そこで本研究は、口腔顎顔面痛患者を対象に、診療記録から MMPI の結果を抽出し、初診時の心理社会的要因を分析するとともに、臨床項目との関連について検討し、さらに口腔顎顔面痛の診断または経過の予測に有用であるかどうか評価することを目的とした。また、三叉神経痛患者に注目して MMPI の有用性についても検討を行った。

一般的に慢性疼痛患者では、健常人と比較して、MMPIのHs（心気症）尺度、D（抑うつ）尺度、及びHy（ヒステリー）尺度が上昇するのが特徴といわれているが、口腔顎顔面痛患者においても、それらの尺度で異常傾向のある患者の割合が高く、心理社会的要因が関連している可能性が示唆された。一方で、病悩期間とMMPIの結果に有意な関連は認められなかった。MMPIは治療効果の予測についても関連があることが報告されているが、本研究では、MMPIと治療効果については有意な関係は認められなかった。また、三叉神経痛は他の原因と比較してHs尺度、D尺度、及びHy尺度の異常傾向のある患者の割合が有意に低く、心理社会的因子との関連が少ない傾向にあった。このことから、三叉神経痛の症状が非典型的であるため診断が難しい場合があるが、MMPIは三叉神経痛の鑑別診断に有用である可能性が示唆された。

上記のように本論文は、MMPIが口腔顎顔面痛の診断に有用であることを示しており、臨床的に意義ある論文であると考えられる。

よって、審査委員会は本論文に博士（歯学）の学位論文としての価値を認める。